学位論文審査の要旨

学位申請者	横田　悠季 人間発達科学専攻　2018年3月単位修得退学		論文題目	心理療法初期における治療関係構築に効果的な セラピストのコミュニケーション―クライエントの視点から―
審査委員	主　　査:	岩壁　茂　准教授	インターネット公表	学位論文の全文公表の可否　：　可
	副　　査:	篭　倫子　教 授		「否」の場合の理由
	副　　査:	石丸径一郎　准教授		□ ア. 当該論文に立体形状による表現を含む
	審査委員:	菅原ますみ　教 授		□ イ. 著作権や個人情報に係る制約がある
	審査委員:	大森　美香　教 授		□ ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている
学位名称	博　士	(社会科学)		□ エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている
(英語名)	(Ph. D. in Developmental Clinical Psychology)			□ オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている
				※本学学位規則に基づく学位論文全文の インターネット公表について

学位論文審査・内容の要旨

本論文では、心理療法の開始初期段階において治療関係を確立するために最適なセラピストのコミュニケーションのあり方をクライエントの視点から質的方法およびアナログ研究法を用いて検討した。

まず、心理療法をドロップアウトした経験をもつ6名に対して半構造化インタビューを実施し、そのデータをグラウンデッドセオリー法を用いて分析した。その結果、クライエントは、来談時に心理的苦痛が強いために、臨床家に頼りたいと感じていた。それに対してしっかりと気持ちを受け止めてもらうという実感が持てない場合、拒絶されたと感じ、臨床家に対する不信感をもつようになることが分かった。

次に、心理療法の継続を決めたクライエント11名に半構造化インタビューを実施し、継続決定にかかわる心理プロセスについて質的に検討した。その結果、ドロップアウトしたクライエントと同様に彼らはかなり切迫した状況の中で来談に至った。セラピストの積極的な関わり、肯定的な声かけなどによって、クライエントは問題解決の意欲と希望が高まった。

これらの結果をもとにクライエントが心理療法初期に来談意欲を高め、治療関係を確立するために、セラピストの積極的で肯定的な関わりが必要であるという仮説に達した。そこで次の研究では、一般的に「傾聴」姿勢として面接初期にとるべき姿勢と考えられているセラピストのかかわりとより積極的で「肯定的」なかかわりの印象の違いを検討するアナログ実験研究を行った。

健常群と臨床群(うつで通院中)それぞれ16名ずつに「傾聴・共感」を主体とする面接場面と「肯定・積極性」を主体とする面接場面のビデオを作成し、観てもらった。協力者には、2つの尺度でカウンセラーの印象に回答してもらった。その結果、いずれの群においてもセラピストの積極的な関わりをより肯定的に評価していることが分かった。

日本における心理療法研究の多くは、セラピストの視点から面接プロセスについてまとめた事例研究であり、本研究のようにクライエントの視点からの検討は非常に少ない。また、質的研究では、合目的サンプリングを用いて、ドロップアウトしたクライエントと継続したクライエントの体験を比較することによって、セラピストの積極的な関わりの性質を明らかにしている点、最終的には量的な研究につなぎ、質的研究から得られた仮説を検討している点についても、ミックス法研究として高く評価できる。　第 1 回審査委員会(2019 年 6 月12 日)では、論文の全体の構成、論理的整合性、図表の形式、参考文献の記載方法などについて指摘が出された。第 2 回審査委員会(2019 年 12 月 2 日)では、指摘事項に対して適切な対処が行われていることが確認されたが、研究の意義についてより明確になるように修正の指示がなされた。2020 年 2 月 5 日に行われた審査会では、論文の整合性が高まり、研究の意義がより明確になったことが確認された。特に第3研究において綿密に実験のビデオが作成されていることから、方法的意義も評価された。2020年3月5日に開催された公開審査会においては、出席者から、分析手法の詳細、研究知見の臨床的意義、等に関する質問が出された。これらの質問に対して、いずれも適切な受け答えがなされた。その後に行われた最終審査委員会(2020 年 3 月 5 日) では、公開発表と質疑への応答が十分であったと確認された。

以上の結果より、本審査委員会は、本論文が博士(社会科学)、Ph.D. in Developmental Clinical Psychologyにふさわしいと判断し、合格とした。